



transforming lives
and communities

global

OM日本ニュース
第79号2017/18年 冬

2

60周年を祝って

神を知り、神を知らせる



7

ヨーロッパの
水路を進む

8

ロゴス・ホープ号：
ハリケーン後の希望

12

ミャンマー
孤児院支援

社会と人生をキリストの愛によって変革する

OM日本の友の皆様へ

羊飼いたちが夜、羊の番をしていると、天の軍勢が現れ、救い主なるお方の誕生を告げました。聖書の中で、天使が一人ではなく、大軍として人の前に現れたという記載はこれでたった2回目のことです。神様が平凡な人々にご自身のご計画を表すのに、なんとも驚くべき方法ではありませんか？



“きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。 **ルカ 2:11**

しかしながら、この超自然的な出来事から2000年経った今も、まだイエス様が彼らの救い主としてお生まれになったことを聞いたことのない人々が大勢います。その数は何百、何千万とのぼります。

異なる民族、言語、国々の人々に羊飼いたちが冬の寒い夜に耳にしたこの同じ救いの知らせを伝える為に、何が必要でしょうか？

私たちが福音の伝えられていない所で、生き生きとしたイエスに従うコミュニティが起こるのを見たいなら、この救われていない人々の為に熱い祈りが必要です。

これまで以上に、日本と他の国々の為の重点的な祈りの波が必要であると信じます。霊性面で飛躍的な前進と、真の収穫を願うなら、まずひざまづくことから始めなければなりません。

皆さんがこのニュースレターのストーリーをお読みになり、失われた人々の元に救いの良い知らせが届けられるようにという新たな願いと情熱で満たされますように。神様の救いのメッセージが、最初のクリスマスの夜のように、大きく、はっきりと鳴り渡りますように。

メリークリスマス！

スミスドルフ・スティーブン

OM 日本代表



2017年のOM日本チーム



transforming lives
and communities



1957 · 2017

“ 私たちは

[OUR STORY]

私たちはイエスに従うグローバルコミュニティです。

私たちは活動の当初から、「世界中すべての人が一度でも福音を聞くチャンスが与えられるように」という信念に強く駆り立てられて歩んできました。

私たちは、こうして、出発しました。どんなに困難な地であっても、どんな民族にも。どんなアイデアでも、どんな夢でもあきらめず、いかなる失敗にも足並みを止めず。何万という人々が私たちに加わり、何百万という人々が福音を聞いたのです。しかし、私たちの働きはまだ終わっていません。

私たちは、福音にはどんな人も、どんな事も変える力があると信じています。圧迫され、忘れられ、取り残されている人たちがいるという現実もすべて。

世界中のOMersが英語で物語る「Our Story」はこちらをご覧ください。
vimeo.com/205987454



GO



イエスに従う者の世界的
コミュニティにご参加ください。

page 14



60周年を祝って

神を知り、神を知らせる

私たちは世界のどんな人も神との和解をするとき、人生もコミュニティも変えられることができる、それは神ご自身のミッションであると信じています。

主と共にこのミッションを行うという特権が私たちには与えられています。

変えられるのは、相手だけではありません。実は私たち自身も変えられるのです。

信仰によって一歩踏み出すその時、まず私たちの心が、そして態度が、人間関係が、人生の価値観が変えられます。

私たちの魂も新しくされ、主に与えられた本来の自分に立ち返るからです。

私たちは型にはまらず、同じ所にとどまらない、イエスに仕える冒険好きな人間の集まりです。私たちのこの冒険に参加される方を探しています。私たちはまず主に耳を傾けます。突然、新しい場所に現れて、自分のやり方や考えを押し付けたりしません。

私たちは、神様が共にいることを確信して毎朝目覚めます。全宇宙を創り、エリコの城壁を崩し、盲人を癒し、死人をよみがえらせた方が共に。これこそが私達を大胆にし、力を与え、前進させてくださるのです。

私たちは、すべての人々は神様の目的のために創られたと信じています。私たちの才能や賜物や情熱は、神様に用いられる為に与えられています。設計するよう導かれれば設計し、企画するよう導かれれば企画する。建築するよう導かれたら建築を。

私たちは自らの言動によって主の光を輝かせ、それによって周囲の人々が主を感じ、主に栄光を返すことを願っています。

イエスのことを一度も耳にしたことのない、様々な文化や言語をもつ人々やコミュニティが数多くあります。私たちの願いは、彼らもイエスの素晴らしさを耳にするようになることです。

私たちは、活気あるコミュニティは自己再生すると信じています。生命は生命を生み出します…常にです！

私たちはイエスに従うグローバルコミュニティです。



60周年を祝って

神に先導していただく

OMという団体は、後ろを振り向かず前進を続け、考えにふけらず行動することで知られている。それでも、記念すべきことを祝い、役に立つことを過去から学ぶ知恵を持ちたいと願っている。 **ローレンス・トン**

OMの物語で栄光が帰されるのは神のみである。創設当初の世代の経験不足にも関わらず大なる試練に耐えることが出来たのは、神が団体の堅固な基盤を築かれたからである。

OMの情熱は、いつも「普通の」人々を宣教へ動員することである。短期および長期のプログラムは、あらゆる背景の人々が一緒に奉仕することを可能にした。

「OMは祈りによって生まれ、祈りによって燃やされ、これからもまた祈りによって力付けられ続ける。」

ローレンス・トン

リーダーたちは参加者たちを訓練し、他の団体での奉仕や、新しく独自の働きを始めるために送り出すことに情熱を注いだ。過去60年以上の間に20万を超えるの人々がOMの働きに参加した。OMでの奉仕の経験を持った卒業生たちによって、100以上の宣教団体が誕生した。何千人もの今日のクリスチャン指導者たちの宣教の基礎はOMでの経験にさかのぼる。

OMは祈りによって生まれ、祈りによって燃やされ、これからもまた祈りによって力付けられ続ける。自分自身の必要も、国々が直面している必要も、すべてを神の憐みに委ねてきた。ビジョンが与えられ、アイデアを膨らまし、信仰が強められたのは、日々の祈りを通してであった。このようなとりなしの祈りの熱心さはこれからも継続されなければならない。

私たちはその最初から、キリストを知ることなく死んでいく人々に福音を届ける緊急性を感じ、あらゆる時間と

機会を伝道のために用いている。この分野で私たちは決して妥協してはならない。

OM奉仕者はわずかなものを用いて大きなことを達成することで知られてきた。神の忠実なしもべとして、委ねられたもの（働きや、お金、土地など物質的なもの）をよく管理したということだ。

OMはいくつかの点で近代の宣教のムーブメントに貢献してきた。第一に、これまでの伝統的な基準をやぶって働き人を受け入れてきたことだ。人生経験や情熱的な献身は、その人がどのような教育を受けたかと同じくらい、もしくはそれ以上に価値がある。OMはまた、普通の人々のために数週間の短期宣教の機会を提供する。短期の経験はその人の人生を変えることがある。このやり方は他の宣教団体にも取り入れられてきた。

第二に、訓練はいつも実践的で継続的な働きをチームとして行なっている。異文化理解、言語習得、ミニストリースキルは理論を学ぶよりも現在活動中のミニストリーの中で深められる。

第三に、OMはしばしば突拍子も無い方法で新しい働きを始めてきた。鉄のカーテンをくぐって共産圏に聖書を密輸したり、グローバルな信仰の現れとして船を用いたり、10代の若者限定の大掛かりな宣教大会を開催してきた。近年では、貧困に苦しむ人々のために農業やビジネスを通したアプローチに取り組んでいる。

我々が直面しなければならない課題

私たちの住む現代社会は急速に変化し、これまでの聖書的な信念に挑戦を挑んでいる。私たちは今や自分たちが少数派であると感じているが、私たちは神の言葉への信念を揺るがせてはならない。しかし、私たちはまた、深刻な社会的不正、押し寄せる貧困問題、ますます敵対的になっている国々に直面している。

#PeopleOfOM

LAWRENCE TONG

国際ディレクター

2013年9月1日、シンガポールのローレンス・トン氏は3代目のOM国際ディレクターに就任。ローレンスのこれまでの経歴は、OMシンガポール理事、OM台湾統括責任者、ロゴス2号のディレクター、国際OM船米国オフィスの資金開発責任者など。ローレンスはまた、急成長している中国でのOMの働きを福祉事業と農業プログラムに重点を置いて先導した。彼はアメリカ人の妻、スーザンにドウロス号乗船中に会い、1989年に結婚。成人した2人の息子、ジョシュとベンジーがいる。





OM創設者ジョージ・パウワー（中央）、前国際ディレクターのピーター・メイデン（左）、現在国際ディレクターを務めるローレンス・トン（右）は2017年2月にタイのバンコクで、OMの60周年を祝い神の宣教での忠実さを覚えるために、400人のパイオニアや指導者たちと共に集まった。

これらを踏まえ、私たちは奉仕者の長期的持続性を強固なものにすることを決意した。これまでは伝統的に宣教師を受け入れる側と思われていた国々からも、今では多くの宣教師が送り出されるようになった。しかし、このような奉仕者の生活を維持するには、私たちの能力は不十分である。彼らの多くは小さな教会や経済的に苦しい国々から来ているため、テントメーカーとして働きながら奉仕するなど、生活の手段をサポート以外の方法で集めるしかない。重要な働きを担う各国事務局のスタッフ、特に事務的な働きを担う人は、世界中のチームやミニストリーに直接影響する仕事をしているが、生活のためのサポートを得るのに苦戦している。何か解決策はあると信じているが、それを一緒に探さなくてはならない。

働きの分野においては、経済、政治、社会の分野でも神の栄光を現わしていこうという神学的流れが教会の中で拡大している。これには多くの意味が含まれているが、今の時代の若者たちは自分の価値観に合った働きに関わりたいと願っている。もしOMが人々の心に訴える働きをしていないなら、人々は共に働こうとは思わないだろう。

内部的には、私たちは自らの成功におごり、新しいことにチャレンジしていくよりも、今の働きを維持するための事務的な働きに埋没しかねない。

管理と事務は伝道の働きを支えるために存在するのであって、その逆ではない。人生とは、問題があっても活気があり、創造的であるべきだ。宣教団体についても同じことが言える。必要なことの全てがきちんと管理しきれものではない。私たちが管理を徹底するあまりこれを見失うと、私たちは「イスに腰掛けているだけの人々」となり、それでは決して「神の良い忠実なしもべ」とはなれない。

OMの使命は「最も福音が伝えられていない人々の間で、イエスに従う者による生き生きとしたコミュニティが形づくられること」である。これはキリストの体である教会全体とのパートナーシップによってのみ達成される。宣教とはどこであっても、地域の教会や宣教団体との共同の取り組みなのだ。OMはこの点においてうまくやってきたのだが、協力関係ではまだたくさん必要がある。また、働き人の募集において発想の転換も必要である。人々の間に住み、彼らの信頼を得、彼らをキリストのために勝ち取り、弟子訓練をし長期献身を必要とするミニストリーに送り出すことだ。福音が届いていない人々は宣教の最後の辺境だ。彼らに福音を届けるのは簡単ではない。落胆、失望、拒絶、反対があるだろう。収穫が来るまであきらめない、聖霊に導かれる屈強さが求められる。

私はOMとそのパートナーに、福音に全く近づくことができないような最も取り残された人々に焦点を置くことで、大宣教命令への関わり方を祈りつつ考えていただきたい。もしOMとすべてのパートナーが、過去60年以上私たちをつき動かしてきた熱情を、再び原動力として生きるとしたらどうだろうか？「神を知り、神を知らせる」というのがOMのそもそもの動機であった。私たちは今日、これまでにないほど、主の再臨に近づいている。「そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません」（2ペテロ3章12節）キリストのためにすべての人々に福音が届くよう共に励むことにより。

祈り、それから 行動する

ピーター・ホーキンス [PETER HAWKINS]

クラップ婦人が近所の高校の生徒のために祈り始め、主が生徒たちを救い、宣教師として出て行くようにと願った時から、祈りは私たちのDNAの一部であった。

デール・ロートンは初期の時代についてこう言う。「最高のアイディアはいつも祈り会から生まれました。」OMのムーブメントは50年代OM創設者のジョージ・パウワー、デール、そして聖書学校の学生からなる小さなグループが集まっていたシカゴの祈りの部屋から始まった。ジョージが祈りの最中、突然飛び上がり、神がメキシコに導いておられると声を挙げた。こうして1957年にオペレーション・モービライゼーションが誕生した。

大規模な夏の伝道活動のために必要な人員不足、資金不足について議論していた困難を極めるリーダー会議の後、祈り会でジョージは宣言した。「神は私に船を用いる様にと言われた！」その6年後、MVロゴス号が活動を開始し、私たちは必死に祈るシーズンに突入した。国々に寄港するための資金、人手、手続きなどの不可能に見える状況に直面したからだ。しかしこの祈りのシーズンこそが、私たちが上からの知恵を見つけ、神の手から与えられ、夜通し祈った後にドアが大きく開かれた時であった。

デール・ロートンはこう語る。「OMの初期を思い返すと、私はしばしば弱さのことを考えます。答えよりも問いの方が多かったのです。祈り会、数日に渡る祈り、祈りの夕べがあったのは、大きな必要、神の業を見たいという必死さの故でした。プランBはありませんでした。神が働かれるか、失敗するかどちらかでした。」

結局すべては私たちと主との個人的な関係と歩みにかかっている。私たちが世界中の人々に対する神の愛と情熱に会う時、私たちの心は燃やされる。祈り室でのOMの始まりからずっと、キリストに従う者の生き生きとしたコミュニティは私たちの祈りを通して燃え上がらせられるのを待っている。



学校の影響を受ける家族

中近東【NEAR EAST】クリスチャンとムスリムの65人の難民・避難民の子供たちは、地元教会の支援によって英語教育の幼稚園に通っている。

そのほとんどは、シリア、イラク、ヨルダン、レバノンで続く紛争から逃れてきた子供たち。多くの親たちは、幼稚園のわずかな学費すら支払うことができない。OMは幼稚園の学費を1年分支払うことを約束し、子供たちは継続して教育と聖書の教えを受けることができる。

「今朝、私はとても疲れていました。しかし、学費を支払いに来た親たちが、『子供たちが本当に変わりました。みんなとても嬉しそうで、幼稚園へ行くのが大好きなんです。』とみんなが同じことを言ってくれたので、とても嬉しくなりました。」とカレン（仮名）は言う。子供たちはそれぞれ異なった宗教の背景を持っているが、幼稚園では聖書のお話と歌を教えている。そして、神様について知ることが、子供たちの家庭に変化をもたらしているのである。子供の親たちはカレンに、幼稚園で学んだ教訓が家庭にも及んでいると言う。両親の中には、子供との接し方が分からない人もいる。「子供たちを罵倒し、虐待することが家庭の中で蔓延している。」とカレンは言う。この国において、ほとんどの家庭では、「ありがとう」や「ごめんなさい」という言葉を使わない。

子供たちは幼稚園で、礼儀、上品な話し言葉、怒った時に暴力で仕返しをしない方法を学んでいる。「家での子供たちの様子は変わりました。幼稚園で学んだことに従っていることが分かります。」と、子供たちの親はカレンに話している。



 幼稚園の働きを続けるために、十分な資金が供えられるようお祈りください。幼稚園のスタッフ、子供たち、両親のためにもお祈りください。

 OMのシリアとイラクの働きのための献金については14ページをご覧ください。



中央アジアの救いのために

中央アジア【CENTRAL ASIA】短期伝道旅行中のOMチームがある病気の人のために祈ったとき、彼は癒された。

例 年のOMの中央アジアでの短期伝道旅行は、地域のすべての都市に福音を届けることを目指している。その方法は、世界中のOMの短期宣教プログラムの多くに倣っているが、参加者を中央アジア内からの人たちに限定している。参加者は集中トレーニングを受けた後、2人から4人のチームに分かれて10日間の伝道活動のために、地域全体を旅行する。

この短期宣教旅行に6度参加したことのあるナスティア（仮名）は、ある時の伝道旅行が特別であったと話す。ある小さな村で、彼女はチームメンバーと一緒に食事を注文してから、そのビルのオーナーの女性と話し始めた。最初、女性はナスティアとチームのメンバーの出身国についてもっと知りたかったようであったが、彼らの会話は神様についての話で終わった。

チームがその女性のために祈ると、彼女は泣き始めて、「私の家に来てくれませんか？私の弟は病気で動くこともできないのです。」と頼んだ。

チームは、「もちろん行って、彼のために祈りましょう。」と承諾した。

女性の家へ向かう途中、チームには心配があった。「もし、祈っても何も起こらなかったら、どうなるだろうか？」と心配していたのである。

オーナーの家に到着すると、チームはまず祈りをささげた。「神様、奇跡を起こされるのは私たちではなく、あなたです。この家の人たちに何かが起こると約束したくはありません。」

家の中では、親族が集まり、病気の弟のベッドの周りに立っていた。チームはまず、年配の親族に自己紹介をしてから、女性の弟に話しかけた。「私たちはあなたに何かをしてあげられるということはありません。何か特別なことが起こると約束することもできません。しかし、私たちには、全能の神様がついておられることを信じています。もし神様の御心であれば、あなたは癒されるでしょう。よろしければ、あなたのために祈ることができます。」

男性と彼の家族はチームが祈ることに承諾したので、チームは座ってお互いの手を手を取って、イエスの名によって祈った。30分後、ベッドで寝ていた男性は座っていた。そして数時間後には、彼は食べ物を求めたのである。

「神様、あなたがなされたことです！」とチームは叫んだ。

チームがその家を守る直前に、病気だった男性が車までやってきて言った。「あなた方が祈った神様に賛美をささげます。」

ヨーロッパの水路を進む

ヨーロッパ [EUROPE] 2017年の12月から、OMリバーボートは、3か月間でヨーロッパの3つの国にある6つの港へ福音を届ける。

道路ができる前には、水路が主な移動の手段であった。何世紀にも渡って、偉大な旅行者や探検家は、この自然の手段を利用して各地を訪れた。町や大都市は貿易や商業のため川のほとりに建設され、人々は移動、飲料水、食料の確保、そして生活維持のため水路を利用した。現代において川の利用は、生活のためよりも、のんびりと旅行を楽しむためのものになってきた。今ではヨーロッパの水路には、リバー・クルーザー（遊覧船）が行き交っている。

アンダンテ号は2007年以来ヨーロッパの川を航行しているリバー・クルーザーである。プラハの都市やライン川沿いの都市を観光するために乗客を運んでいる。しかし、2017年12月から3ヶ月間は、OMのリバー

ボートとして、今までとは全く異なった乗組員が乗船し、異なった目的のもとで航行することになった。

12月末にオランダで開催される大きな世界宣教大会（欧州ミッションネット。参加者約2000人）に参加した後、今回リバーボートに参加する80名はアーネムに停泊中の船に乗船。その後3ヶ月間にわたり3カ国（オランダ、ドイツ、フランス）の6つの港を訪問する。

リバーボートのリーダーであるロバート・ヤン・スタークは次のように語っている。「アトラクションの『エスケープ・ルーム』（脱出ゲーム）、船内カフェ、地元教会でのイベントなどの活動を通して、参加者たちは、生き生きとした共同体の生きた手本として、この船を訪れる人々に福音を分か

ち合い、イエス様のお姿を現わすことでしょう。」

「エスケープ・ルーム」とは、プレイヤーが手がかりやヒント、戦略を使って一連のパズルや謎を解決する体験型アドベンチャーゲームである。日本で生まれたこのゲームは、最近ヨーロッパでとても人気があり、OMはこのゲームを取り入れ、若者が宣教に興味を持ち、この世界の必要を伝えるための道具として用いている。

「ドイツの3つの港でリバーボートを開催することを楽しみにしています」と、OMドイツのリーダー、ジャン・ウォーカーは話す。「これは、私たちが地元の教会に関わり、世界宣教への情熱を分かち合い、『最も福音が伝えられていない人々の間で、イエスに従う者による生き生きとしたコミュニティ』が形づくられることを目指す旅へとクリスチャンを動機付け、動員するための素晴らしい機会となるでしょう。」



アンダンテ号の操舵室。写真の二人はリバーボートの初代ディレクターとなるピーター・ニコルと、ボランティア船長のクラス

アンダンテ号の船内の様子



PRAY

ヨーロッパ、中東、中央アジアなど世界中のOMと通した神の働きのために一緒に祈ってください。

ロゴス・ホープ号

GIVE 

寄港先の人々に助けを提供し、希望を届けるための
ロゴス・ホープ号の働きを
支えて下さいませんか？

page 14



ハリケーン後の希望

アンティグア・バーブーダ [ANTIGUA & BARBUDA] ロゴス・ホープ号のスタッフは、ほとんどの建物の屋根が吹き飛ばされたり、多くの家屋が破壊されたカリブ海の島バーブーダを襲ったハリケーンイルマの被害者を人道支援機関であるサマリタンズパースと共同で援助した。

ジュリー・ノックス [JULIE KNOX]

私の愛する島は、まるで真ん中に爆弾が落ちたかのように引き裂かれてしまいました。」と病院で働くデヴォン・デソウザは言う。「でも私たちはサマリタンズパースとロゴス・ホープ号に感謝しています。私たちを手伝うために来てくれて、私たちのことを気にかけて助けたいと思っている人たちがいる、ということを示してくれたのですから。」

150人のスタッフが、アンティグアから Mission Aviation Fellowship (MAF) の飛行機と、サマリタンズパースがチャーターした貨物飛行機で現地の援

助チームに加わった。サマリタンズパースは小型発電機を家庭に配備し、島の飲料水の唯一の供給源となる水のろ過システムを提供した。ロゴス・ホープ号のボランティアは電気や大工仕事のスキルをもって住居を修理したり、瓦礫を片付けたり、またバーブーダの人々に寄り添って、彼らの身の上話に耳を傾けた。

あるスタッフには、甚大な被害を目の当たりにしたのは初めてではなかった。ジョハンナ・シルバ（スリランカ）とその家族は、2004年に母国が津波に襲われ15万人の命が奪われた

後、人びとを助けた経験がある。「バーブーダに到着するまで、被害がこんなにも大規模だとは思ってもみませんでした。」ジョハンナは瓦礫だらけの道に立って語る。「人々は持っているものを全て失ったのです。私は初め圧倒されてしまいましたが、まじめによく働くチームと一緒に、変化を本当に必要としているコミュニティーに変化をもたらすために働くことができ、とても励まされました。」



壊れた屋根や家を修理し、地元の人と一緒に祈るロゴス・ホープ号のスタッフ



アンティグア・バーブーダの寄港レポートをご覧ください。

vimeo.com/238928295

その他のビデオもご覧いただけます。 www.logoshope.tv

アンティグア・バーブーダのセントジョーンズに停泊するロゴス・ホープ号



サマリタンズパースのボランティアと協力して建物の屋根を修理するスタッフ



バーブーダにあるこの家はハリケーン・イルマによって完全に破壊された。

その地域のコーディネーターであるマーク・ラングハムによると、サマリタンズパースにとってもロゴス・ホープ号との協力関係は祝福であり、士気を高めるものであった。「来てくれたチームは本当に素晴らしいです。」と彼は言う。「彼らは休むことなく働き、驚くほど良い態度で、喜びと興奮をもたらして私たちを日々活気づけてくれています。私にとって、それこそがキリストの体です。見返りを求めること

なく他者に仕え、多くの国を代表する、教会全体の美しいイメージです。

バーブーダの復興には最低2年かかると想定される。サマリタンズパースはこの島に常駐する。ロゴス・ホープ号はアンティグアのセントジョーンズで、立ち退きを余儀なくされたバーブーダ人のために船内特別イベントを開催した。シラズ・ホプキンはその中でとりわけ大きな声で歌っていた一人で、彼の家族とコミュニ

ティーが困難を切り抜けることができた感謝に満ち、神を賛美していた。「持ち物は取り換えることができるし、戻って来ます。神様はロゴス・ホープ号とサマリタンズパースをすでに送ってくださいましたし、これからも他の助けをもたらしてください。それで私たちは神様の素晴らしさに感謝しているのです。神様はバーブーダを再び立ち上げてくださいます。」シラズは輝いていた。





クルーとして3か月のSTEPプログラムや1~2年間の訓練プログラムに参加しよう!

page 14



ロゴス・ホープ号はラテンアメリカへ向かっている

神様の愛を益々体験する



今年行われたSTEPのプログラムに参加し、日本に帰国してから早くも数カ月がたちました。船では書店で働く機会が与えられ、毎日忙しく充実した日々を送っていました。

約400人の乗員組と生活していたため、時には生活に難しさを感じることもありました。普段の生活とは違い、どんな時にも周りには人がいて、プライベートな空間はあまりなく、まるでオンとオフの生活を試される日々のような状況があったからこそ、私自身どんな時でも同じ態度で同じ信仰を持つことを心がける習慣を養うことができました。

また、船の乗組員は国籍が違うため、全く違う文化、ライフスタイル、考えを持っており、時には他の人の意見を尊重することを難しく感じると思います。

神様が私たちのことをおのり受け入れ、愛してくださっているように、同じ愛をもってお互いに接していく中で、神様の私への愛を益々体験することができました。船での生活はとても刺激的で沢山のことを学ぶことができると感じます。これからも続けてどのような場所においても福音を述べ伝え続けるものとして働いていきたいと思っています。

朝生ハンナ

主の力によって毎日を歩む

2年間のロゴス・ホープ号での任期を終えて10月に無事帰国しました。皆様の沢山のお祈りとご支援に本当に感謝します。1年目はホテルサービス、2年目はインターナショナルカフェでの奉仕も守られて成長させられて終えることができました。

この時を通して私は日々自分の弱さ、足りなさを認めて主の前に謙り、主の力によって毎日を歩むことの恵みを体験しました。自力で頑張るのではなく生かされてゆくこと、仲間に助けを求める事、毎日自分のできるすべてを主に人に忠実に捧げてゆくことが主の働きを進めていくことにつながるのだと、沢山の失敗や主が与えて下さったひとつひとつの課題を通して学ぶことができたと思います。

わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

ヨハネ 15:5



特に2年目はリーダーとして10人という小さなチームでしたが、それぞれの個性と違いをいかにか活かしてよいチームにしてゆけるかなど考え祈るなかで、本当の教会(キリストの体)としてお互いの為に祈り励まし、刺激あつて主の前に共に成長してゆくことの大切さを、身をもって体験しました。

この2年間、主が愛してやまない世界中の素晴らしい人達に出会い、共に時間を過ごすことができたこと、世界中の兄弟姉妹たちと共に主を賛美することができたこと、また沢山の奇跡を、身をもって体験できたこと心から感謝してすべての栄光を主に返したいと思っています。将来は家族、子ども、女性などお助け支える働きに携わることができたらと思いつつ次のステップへの準備を進めています。主がすでにそなえてくださっている職場や学校、宣教の地への道が開かれるようお祈りに覚えて頂けたら幸いです。

川口真琴

私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り上げましょう。

詩編 73:28



#PeopleOfOM

HANNA ASO

日本出身のSTEPのプログラム参加者

船での生活は とても刺激的で 沢山のことを学ぶことができると思います。



ロゴス・ホープ号の働きを助けるために1000円以上献金して下さった方全員に、A4サイズ高画質の2018年OM船カレンダー日本語版をプレゼントします。



2018 カレンダー

omjapan.org/shop

見よ、私はいつも新しいことをする

日本【JAPAN】三重県の地方農村部においてOM宣教師夫妻がこれまでにない方法で伝道活動を行なっています。 **近藤健二**【KENJI KONDO】

神様は本当に思いもつかないことをするな」といつもよく思われます。

まず、自分が教会の無い地方農村部で生まれ、日本での学生・社会人生活嫌で海外に飛び出した先で教会に出会い救われたこと。その後、海外で宣教団体に所属し、海外で生活をしていましたが、数年かけて神様は僕の心を変え、「日本人の救い」という重荷をくれたこと。5年前、カナダ人の妻、子供3人と共に、日本での生活が与えられたこと。しかも、自分が生まれ育った村、そして実家で宣教師として。全部「神様の計画」だったんだと思わされます。

私たち家族が宣教師として住んでいる場所は、人口1万2千人の三重県の農村部です。住んでいる



6月に3人目の子が与えられました

集落は、私たちの先祖が戦国時代（16世紀後期）に開墾されて始まった村です。（住民の姓が大半同じ）ひい爺ちゃんが地主で、爺ちゃんが長男、親父が長男として受け継がれて来た、いわゆる「先祖の土地」に住んでいます。ヤマトタケルの時代よりあるこの土地では、宣教師が住んだ記録もなく、教会もありません。伝道的には、「種まき」をする前の「土地を耕す」段階です。3年前、本家の長男である父の救い・洗礼を機に、僕たちの家族は親戚の同意の元に檀家を辞め、何百年あった先祖の墓もお寺から抜きました。この地区で賛美の歌が響くよう、父の葬儀を地元の公民館で行い、伝道集会として十字架の福音を語りました。あれから3年、私たちは地元の組に属し、隠れ宣教師として、この地域の人たちに伝道活動をしています。



秋祭りでの賛美の様子

聖書にある「見よ、私はいつも新しいことをする」という言葉どおりに、これまでの「教会プログラム」重視の伝道方法とは違い、まったく型にはまらない形で。例えば、地区の自警団において活動し、そのコネを生かした個人伝道や、また3年連続、地区の祭りにおいて、やぐらの上で賛美歌を歌ったり。また2年連続でカナダからの宣教師が訪問した時、地元の小学校と国際交流に生かしたりと多彩です。「神様は次は何をされるんだろう」と言う期待の中にいます。自分の思いと力ではなく「神様率先」でこれからも行きたいと願っていますので、どうかお祈りください。



左：ハンモック、ロープウエー、縄ばしごなど、子供たちが遊べる空間を私たちの敷地内に作りました

下：私たちの伝道する三重県の地方農村部



ミャンマー孤児院支援

手軽に観光に行ける国の一つになった

ミャンマー【MYANMAR】2002年以降、毎年続いているOM日本のミャンマー孤児院訪問ツアー。建物の建設や施設設備のプロジェクト、生活自立支援、災害時の救援活動などの対象としている複数の孤児院を訪問するツアーには、これまで延べ146名が参加し、子どもたちとの交流を深めてきた。

酒井信也【NOBUYA SAKAI】

かつては外国人の入国は厳しくチェックされ、渡航のためのビザを申請するにも大使館にいろいろな書類を提出しなければなりませんでしたが、今は手軽に観光に行ける国の一つになった。数年前からは日本からの直行便も就航し、仕事と観光で数多

くの日本人が訪れるようになっていく。毎回孤児院訪問のために衣類や文房具、日用品などを募って持って行くのであるが、直行便は手荷物を2個まで預けられるようになり、これまでの倍の量の支援物資を持って行けるようになった。



雨が降った後の孤児院の正面

ホープ孤児院の水事情

2008年のサイクロン災害で親を失った孤児たちを何人かでも助けたいと、引退したクリスチャン夫妻が被災地から8人の子どもたちを引き取って始めた孤児院です。小さな貸し家で窮屈に暮らしていましたが、OMの支援で2013年に現在の土地建物が与えられて引っ越して来ました。日本からの献金で通りに面した敷地に売店を建て、生活の足しにしています。

生活用水は雨水と井戸水でまかなっていませんが、井戸の水質が悪くて濁った水しか出てきません。簡易浄水器でも過しても飲み水には適さず、飲用水はボトルの水を購入しています。この夏、井戸をもっと深くして水質を改善するプロジェクトに着手しましたが、50メートルほどの深さの試掘をしても水質は改善しませんでした。その後、最近この地域で工場を建設する際に良質の水を確保しようとして90メートルほ

どの深さの井戸を掘ったが水質は改善しなかったことが判明。井戸を深くすることは断念し、高価な浄水装置を導入することを検討しました。しかし、浄水器の毎年のメンテナンス費用を計算すると、結局、飲用・調理用としてボトルの水を買うほうがコストが低いことがわかりました。ただし、それはボトルの水が今より値上がりしなければの話。1年間に必要な飲用水の費用は日本円で6万円ほど。今後ボトルの水の値段が高騰するようなことになれば、浄水器の設置を検討しなければなりません。ヤンゴン郊外のこの地域に水道が引かれるのはいったい何年先になるのでしょうか。



雨水と井戸水をためておく給水タンク

アナイメ孤児院建設プロジェクト

OMが最近になって支援の対象とした孤児院。男の子が38人、女の子が22人暮らしています。日本からの支援金が住居と別棟のトイレをつなぐ通路の舗装と外灯に用いられました。一つの建物の二階を男女別に二つに仕切って生活していますが、特に男の子の住居スペースがとても小さく、二段ベッドの数も人数の半分しか置くことができません。今は男の子たちは一つのベッドに二人が寝ています。これから大きくなっていく子どもたちのために、住居スペースの拡大はひっ迫した必要。

今ある建物は、2008年にミャンマーを襲ったサイクロンの災害復興事業の一環として、当時現地で活動していたアメリカ人の寄付で建てられたそうです。これと同じ大きさの建物をもう一つ、隣の敷地に建てて、それぞれの建物の二階部分を男の子の住居、女の子の住居にしたいと願っています。建物の建設費用の見積額は約300万円。OM日本の建設プロジェクトとして進めていきますので、ご協力くださる方はぜひ、ミャンマー孤児院支援献金としておさげ下さい。



日本からの支援金で作られた、住居と別棟のトイレをつなぐ通路の舗装と外灯

今後新しい建物が建てられる土地

祈ろう！

世界のため、OM ミニストリーのために
一緒に祈りましょう！



60周年を祝って page 2-5

- 過去60年の間にOMで奉仕した20万人を超える人々、OM卒業生から生まれた1100以上の宣教団体、OMにルーツを持つ何千人ものクリスチャン指導者たちを神に感謝します。
- OMとそのパートナーが過去60年以上私たちを突き動かしてきた熱意を新たにできますように。最も福音が伝えられていない人々の間で、イエスに従う者による生き生きとしたコミュニティが形づくられるのを見るために、「神を知り、神を知らせる」という情熱が引き続き私たちの原動力となりますように。



WORLD NEWS page 6 & 7

学校が家族に与える影響

- 奉仕を続けるために、幼稚園が十分な資金を得るよう、またスタッフ、子供、両親のために祈ってください。

中央アジアの救いのために

- 中央アジアでOMが企画した短期アウトリーチ期間中に、女性のチームを通して男性が癒されたことを神に感謝しましょう。

OMリバーポート

- オランダ、ドイツ、フランスを流れるライン川沿いの寄港地でこれからスタッフが出会い、教え、共に働く人々の心が神によって整えられますようお祈りください。

ロゴス・ホープ号 page 8-10

- バーブダの人々に助けと希望をもたらすためのMAF、サマリタンズパース、ロゴス・ホープ号のチームの素晴らしい協力関係を神に感謝しましょう。
- 2004年以来久しぶりのOM船のラテンアメリカ寄港のために祈りましょう。スペイン語とポルトガル語の本が十分に供給されるよう、また希望のメッセージによって多くの人生が変革されるようお祈りください。



OM日本 page 11

- OM日本のチームをここ数年で大きく拡大させてくださった神を讃えます。これからも海外からの奉仕者が日本に送られてきますように。
- イエスに従う者による生き生きとしたコミュニティを更に見られるよう、日本におけるOMのミニストリーのためにお祈りください。

ミャンマー孤児院支援 page 12

- 今回の孤児院訪問ツアーが参加者と孤児院の祝福となったことを感謝します。子供たちが元気に成長できるようお祈りください。
- ホープ孤児院の子どもたちに、安心して飲める水が与えられるように。アナイメ孤児院に子どもたちが暮らすのに十分な建物が与えられるようお祈りください。



孤児院訪問ツアーの参加者。
さあこれから孤児院へ！



2017年8月21～28日

孤児院訪問ツアー

今回は参加者7名、酒井信也と下崎香世が引率しての総勢9名で、支援している6か所の孤児院と、OMが運営する幼稚園1か所を訪ねてきました。毎年会うなじみの顔、初めて会う新しい顔、もう施設を築立って見えなくなった顔…。もちろん参加者の皆さんにとっては初めて会う子どもたちですが、用意した集会のプログラムですぐに打ち解け、互いに笑顔で楽しい交流の時を持ちました。参加者の高山さんご夫妻は日本の文化紹介で「二人羽織」を披露。背後に隠れた奥様が手探りでカップラーメンをご主人に食べさせます。さすがご夫婦。容赦なく麺を顔に運び、それが口でなくとんでもない所に行くのを必死に食べる姿は子どもたちに大受け。誰かやってみたい人は?と促すと、どの孤児院でも一番年上の男の子たちが押し出されて来ます。自分たちのお兄ちゃんの二人羽織に、みんなは大声援と大爆笑。集会後は折り紙したり、自分の名前を筆と墨でカタカナで書いたり、似顔絵を描いてもらったり。楽しい時間はあっという間に過ぎ去ります。いつまでも手を振ってくれる子どもたちを後に車は出発。このツアーには、成長していく子どもたちの姿を楽しみにして、何度も参加してくださる方もおられます。どうか、子どもたちが主になって肉体的にも霊的にも元気に成長していけるようお祈りください。



孤児院で習字を教える日本からのチーム



GIVE

OM日本の建設プロジェクトとして進めていきますので、ご協力くださる方はぜひ、ミャンマー孤児院支援献金としておさげ下さい。

page 14



Pray, Give & Go

捧げよう!

OMの働きを覚えてご支援下さい。

🎁 世界的な難民危機

現在、過去最高の6,560万人の人々が世界中で故郷からの立ち退きを余儀なくされています。2,250万人が難民で、その内半数以上が18歳未満。

OMの宣教地の多くは、ヨーロッパ、中東、東南アジアの難民、避難民救助のプロジェクトを実施しています。毎分20人もの方が世界中で立ち退きを強制されています。みなさんの献金がそのような人々に手を差し伸べるのに役立ちます。

バングラデシュに難民として流入しているロヒンギャ族に対する援助にもOMは取り組んでいます。詳しくはウェブページの記事をご覧ください。

omjapan.org/rohingya

🎁 アナイメ孤児院建設プロジェクト

ミャンマーのこの孤児院では、狭い部屋に38人の男子たちが狭いベッドに二人ずつ寝て暮らしています。OM日本では孤児院住居の建設プログラムを進めています。敷地内に建てる住居の建築予算は300万円。みなさんの献金で、子どもたちに新しい家を提供することが出来ます。

🎁 ログス・ホープ号ヘルプ・ミニストリー献金

ログス・ホープ号は寄港する国々で、人道支援を提供するヘルプ・ミニストリーを行っています。水のろ過や建設プロジェクトから、老眼鏡、歯科、医療の援助に至るまで、OM船はできる限り多くの援助を提供することを願っています。みなさんの献金は、必要な物資を購入し、寄港先で必要な助けを届けるために用いられます。



このビデオではログス・ホープ号のヘルプ・ミニストリー部署が実際にどんな活動をしているかという全体像を見ることができます。

vimeo.com/89672695

🎁 OM日本事務局支援献金

OM日本事務局の運営と宣教師の派遣業務は、献金によって行われています。事務局のスタッフは全員、ボランティアであり、家族や友人、教会からの経済的なサポートによって活動を続けています。みなさんの献金は、事務局の運営費とサポート額が十分でないスタッフの支援金として当てられます。

連絡先 & 献金送金先

特定のミニストリー、プロジェクト、宣教地、宣教師のための支援金を送って下さる方は、振込用紙の通信欄に送金内容をご明記の上、OM日本の口座にご送金くださいますよう、お願いいたします。

www.omjapan.org/give

郵便振替口座 02100-0-24998
加入者名「OM日本事務局」



行こう!

短期宣教旅行

1週間から6か月に渡り、宣教の体験や訓練を受けることができます。OMは一年を通して、世界50か国で250のアウトリーチを主催しています。OM日本では日本人のためのガイド付きツアーも提供しています。教会などの団体や個人で参加でき、要望や条件に合わせて企画します。

🌟 夏期宣教ツアー：孤児院訪問と子供集会



- 📍 ミャンマー
- 📅 2018年8月18日～26日(予定)
- 💰 15万円(予定：日本からの交通費、食費、宿泊費等すべて込み)
- 📌 内容：ヤンゴン周辺でOMが支援しているいくつかの孤児院を訪問し、日本からの支援物資を届け、子供集会を開きます。5～6名のグループでの参加の場合、日程をご相談に応じます。保護者同伴の子どもの参加もできます。特に若い人たちは、現地での孤児たちとの交わりを通して、これまでとてもよい影響を受けてきました。



🌟 新人研修会のボランティア



- 📍 オランダ
- 📅 2018年8月19日～9月1日(前/後半一週間の部分参加可)
- 💰 115ユーロ(予定：食費、宿泊費)
- 📌 18歳以上。基礎的な英語が理解できること。
- 📌 新人宣教師のための研修会がスムーズに運営されるためにはボランティアの働きは不可欠です。奉仕の一例としては、子供プログラム、施設の清掃、食事の準備等です。空き時間には研修会にも参加できます。世界中からのクリスチャンと過ごす2週間は、神様の世界に対する愛と素晴らしいご計画を知る機会となるでしょう。



🌟 OM船STEP



- 📍 ログス・ホープ号、またはアメリカ合衆国
- 📅 2～3か月(船)、2週間～3か月(アメリカ)
- 📌 多くの文化が共存するログス・ホープ号やアメリカのサウスカロライナ州フロレンスにあるOM Shipsミニストリーセンターで、世界宣教を体験してみませんか?

長期宣教

異文化の地で人々と福音を分かち合いませんか? イエス様の輝く弟子として、コミュニティで活躍しましょう。OMは、神様があなたのユニークな賜物を用いてくださる奉仕先に行くことができるよう、お手伝いをします。

🌟 海外での宣教奉仕の機会

- 📍 110カ国
- 📅 2年間～
- 📌 詳しい情報、質問などはOM日本事務局まで。現在参加可能な奉仕先をオンラインで見ることができます。

www.om.org/search/opportunity (英語)



🌟 事務局スタッフ募集中

- 📍 日本
- 📅 1年間～
- 📌 OM日本では宣教師の派遣と受入れに関する人事と会計、記事の翻訳、ホームページなどの働きに携わるスタッフを求めています。世界のOMに属する全員は支援者からのサポートを得て宣教師としての立場で奉仕しています。世界宣教の前線を支える事務局での働きに、ビジョンと重荷が与えられていませんか? 関心のある方はお問い合わせください。



宣教&英語

世界中で行われているOMの宣教プログラムの多くは、ミニストリーへの参加と同時に、国際的な環境で英語も上達させることができる機会も提供しています。もっと集中的に英語を学びたい、将来世界宣教に参加するために語学を習得したい、という方にはアメリカやイギリスでの行われている英語のレッスンとミニストリーへの参加が組み合わされたプログラムをお薦めします。

OM船English Immersion Program

- 📍 アメリカ合衆国
- 📅 2018年3月2日～5月20日
- 💰 2,300米ドル (予定: 滞在費、食費)
- 👤 18歳以上のクリスチャンで宣教地や教会で仕えるために英語力が必要な方
- 📌 宣教地での働きや、日本国内外の教会でのミニストリーのために英会話を上達することがこのコースの目的。弟子訓練や異文化に適應するための指導、フィールドトリップ (実地旅行) もあり。国際的な共同体で生活しながら、午前中は書籍の梱包や出荷作業を手伝い、午後は少人数のグループで英語を学びます。(個別指導あり。)

ELCO 英語研修 & 宣教訓練

- 📍 イギリス
- 📅 毎年1月、5月、9月からの4ヵ月間
- 💰 2100英国ポンド (英語研修、食費、宿泊費)
- 👤 18歳以上。基礎的な英語が理解できること。
- 📌 週20時間の英語のレッスンの他、地域での伝道 (地元の教会と一緒に子供、青年への伝道など) を通しての宣教訓練、2週間の特別伝道プログラムにも参加。月1回の社会見学あり。
- ※英語研修がない宣教訓練だけのプログラムもあります。お問合せ下さい。



詳しくはOM日本事務局までお問い合わせください。
短期・長期宣教のお知らせや最新情報は下記の
リンクからご覧になれます。

www.omjapan.org/go



宣教弟子訓練

Mission Discipleship Training (MDT)

自分が何をなぜ信じているのかを学び、どんな状況の中でも自分の信仰を分かち合う自信を身につけます。チームに属しながら、外国語や様々な世界観に浸ることができます。OMの宣教弟子訓練は、世界に変化を与えたい、そして同時に神様に自分を変えていただこうと熱望するためのプログラムです。

MDT SOUTH AFRICA

- 📍 南アフリカ
- 📅 毎年2月、8月からの6ヵ月～12ヵ月
- 👤 18歳以上。英語力が十分にあること。
- 📌 アフリカでの他のミニストリーに関わることによって、南アフリカでの期間を一年延長することができます。

ログス・ホープ号

- 📍 世界中
- 📅 1年間/2年間
- 📌 ログス・ホープ号で、様々な国を航海するボランティアのクルーとしてミニストリーに参加します。人生を変えるようなアドベンチャーがあなたを待っています。OMの公式なMDTプログラムではありませんが、ログス・ホープ号船上でも、それぞれの部署での職業訓練の他に、様々な形式の宣教、弟子訓練が提供されています。

MDT UK

- 📍 イギリス
- 📅 2018年8月21日～2019年1月20日
- 💰 2900英国ポンド (研修、食費、宿泊費)
- 👤 参加者には英語の理解力が求められます。言語/勉強のサポートは、必要に応じて利用できます。
- 📌 MDT UKは、オランダでの10日間のグローバルオリエンテーション会議 (GOカンファレンス) を皮切りに始まります。その後英国バーミンガム郊外の訓練センターに拠点を置くことになります。英国内外のミニストリーに参加することで最長2年まで延長が可能です。



transforming lives
and communities

OM日本・OM Japan

www.omjapan.org fb.me/omjapan

+81 (0)76-239-2830 (TEL&FAX) info.jp@om.org

〒920-0277 石川県河北郡内灘町千鳥台2丁目394

OM日本ニュース 第79号 2017/18年 冬

発行人: 酒井信也 編集: マルティン・フィリップ&祐子

写真提供: Bryce McKay (P4-P5), Josiah Potter (P5&P13), Jay Schipper (P6), Andrew W (P6), Garret N (P14), OM International (その他)

聖書: 新改訳

“ 私たちの願いは、
最も福音が伝えら
れていない人々の間で、
イエスに従う者による
生き生きとした
コミュニティが
形づくられることです。

110カ国で 社会と人生を キリストの愛に よって変革する



OMとは？

1957年にジョージ・パウワーによって始められたOM (Operation Mobilisation) は、現在世界約110カ国で3200名が活動している世界的宣教団体です。OMは世界における福音伝道のために、あらゆる方法での活動と、若い奉仕者達の育成を行っています。また、特に福音が届きにくい地域に重点を置き、その地域での教会開拓や伝道活動を強化する働きも担っています。

OM日本について

日本におけるOMの働きは、70年代のロゴス号日本初寄港から始まりました。その後日本からもOM船に参加する人々が起こされ、1992年にOM日本が設立。以後25年以上にわたり、OM日本は多くの奉仕者を海外に送り出してきました。そして、2009年から日本国内における活動が外国人並びに日本人宣教師によって始まりました。OMは特定の教団や教派には所属していませんが、多くの教会とのパートナーシップを築きながら活動しています。



福音伝道

キリストを信じる者として、大宣教命令に基づいて伝道をしています。神はごく普通の人々を大いに用いる方であることを覚え、福音を宣べ伝えています。



人道支援

人道支援の働きを通して、貧困や困難のうちにいる人々、社会で疎外されている人々に仕え、キリストの愛と憐れみを示しています。



教会開拓

教会開拓では、主に既存の教会が少ない地域を中心に、集会やイベントを通して交わりの機会を設け、様々な方法で神にある共同体の形成に努めています。



正義

義でおられる神に遣わされた者として、児童労働や組織的、社会的暴力のもとで不当な扱いを受けている人々に寄り添い、助けるための働きをしています。



訓練・育成

宣教地における弟子訓練を通して、技術や知識だけでなく、信仰面からも奉仕者の指導と育成を行っています。



祈ろう！



捧げよう！



行こう！

